

研究主題「音楽のよさを味わって聴くことができる生徒の育成

—鑑賞領域の学習における、曲の味わい方を焦点化させる指導の工夫を通して—

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
八王子市立南大沢中学校 教諭 清水 裕子

第1 研究のねらい

本研究では、鑑賞領域の指導に焦点を当てた。研究主題として掲げた「音楽のよさを味わって聴くこと」について、中学校学習指導要領解説音楽編（平成29年7月）（以下、「解説音楽編」と表記。）では、「例えば、快い、きれいだといった初発の感想のような表層的な捉えに留まることなく、鑑賞の活動を通して習得した知識を踏まえて聴き返し、その音楽の内容を価値あるものとして自らの感性によって確認する主体的な行為のことである。」と示されている。

これまでの鑑賞領域の指導では、曲を聴かせた後の手だてを工夫することが多かった。その結果、生徒が情景を想像しながら聴き、なぜそう聴こえるのか音楽を形づくっている要素と関わらせて捉えることができるようになった。しかし、作曲者の思いに踏み込んで更に考えることや、自分にとっての価値付けをしてその音楽の批評をしたりするところまでは深まらないなどの課題が残っている。

そこで本研究において、曲を聴かせる前の指導に着目し、生徒がその音楽の魅力について自分の言葉で根拠をもって表現できる指導の工夫を開発する。

また、本研究における、生徒が「音楽のよさを味わって聴いている」姿とは、授業で聴いた曲の好き嫌いなどの表層的な捉えを、音楽的な見方・考え方を働かせた音楽の学びによって深め、自分の経験と統合して聴きながらよいところを見付け、その音楽の魅力について自分の言葉で根拠をもって表現する姿であると考えた。

生徒が音や音楽と出会い、これまでに生徒自身が得た経験や知識を生かしながら、知覚・感受する学びの過程を大切にすることで、音楽に対する考えや見方が広がるような学習を実現する。そのためには、音楽と出会う場면을工夫し、曲の味わい方を示すことで、生徒がその音楽の魅力について自分の言葉で根拠をもって表現できる学習につながると考える。

第2 研究仮説

鑑賞領域の学習において、生徒が曲の味わい方を焦点化できるように曲を聴かせる前の指導を工夫することで、生徒は、音楽に対する感性を働かせ、味わった音楽の魅力を自分の言葉で根拠をもって表現することができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

- (1) 平成元年以降に告示された中学校学習指導要領について分析を行った。その結果、「教科の目標」では、「音楽に対する感性」、「豊かな情操」、「音楽を愛好する心情」など共通して示されている言葉があり、音楽科教育において中心となる理念は変わらないことが分かった。本研究で育てたい生徒像は音楽科を貫く理念からも重要であると捉えた。
- (2) 「中央教育審議会答申 別添8-3『音楽科、芸術(音楽)における学習過程のイメージ』」（平成28年12月 文部科学省）と解説音楽編から、鑑賞領域における知覚・感受について研究を行った。その結果を基に、生徒の感性を働かせ、音楽のよさを味わって聴かせることが

できるよう、授業の改善方法を考察した。

2 調査研究

(1) 都内公立中学校 1 校における第 3 学年生徒 60 人の意識調査

調査結果(図 1)から、聴いた音楽の魅力をもつて、自分の言葉で根拠をもつて表現することについて課題があると考えた。よつて、鑑賞の指導において、音楽を形づくつている要素と曲想との関わりを感じ取り、自分の言葉で根拠をもつて表現することができるようにするための指導の手だてが必要である。

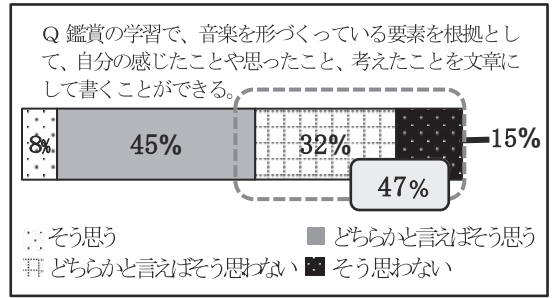


図 1 第 3 学年生徒 60 人の意識調査より

(2) 都内公立中学校 17 校の音楽科教員 17 人の意識調査

「鑑賞領域の指導で、生徒が感性を働かせ、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えていくことに課題がある」と回答した教員は 71%であった。また、曲を聴かせる前の指導の工夫についての記述では、意欲や興味・関心を高めるためのものがほとんどであった。この調査結果から、教員の鑑賞領域の指導において、生徒の音楽に対する感性を働かせ、音楽のよさを味わつて聴くことができる指導の工夫が必要であると考えた。とりわけ、曲を聴かせる前の指導においては、生徒に音楽的な見方・考え方を働かせるための工夫が必要である。

3 開発研究

本研究において、生徒が音楽を味わつて聴くことができるようにするためには、曲の味わい方を焦点化させる指導の工夫が必要であると考えた。そこで、曲の味わい方を焦点化させる指導の手だてを開発した。

(1) 曲の味わい方を焦点化させる指導の工夫

ア 題材の目標を踏まえて教材研究(楽曲分析、生徒の生活経験、他教科での学びなど)を行いながら、生徒の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくつている要素を選ぶ。この選んだ要素を「今回のエレメント」と呼ぶ(図 2)。

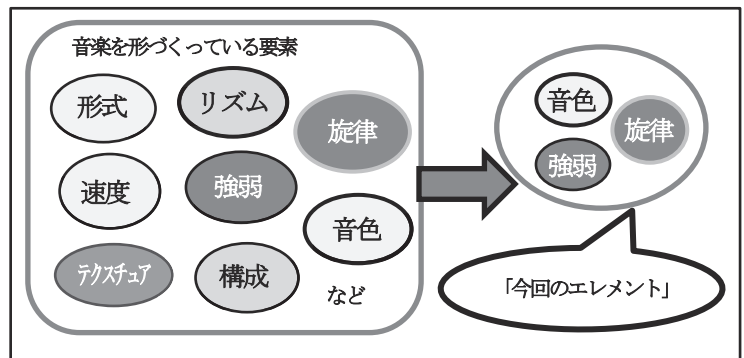


図 2 「今回のエレメント」のイメージ

「今回のエレメント」を選ぶに当たっては、この曲を通して資質・能力を育成するために、音楽を形づくつている要素と曲想との関わりをどのように知覚・感受させれば効果的かを考える。また、中学校学習指導要領(平成 29 年 3 月告示)に記載のある〔共通事項〕アの「思考力、判断力、表現力等」に関する資質・能力を踏まえる。

イ 「今回のエレメント」と曲想との関わりにどのように着目させるか焦点化する。「今回のエレメント」をよりどころとして、曲中のどの部分について思考・判断させるかを明確にする。

ウ 「今回のエレメント」と曲想との関わりを手掛かりに、学びを深めていく学習を構想する。例えば、作曲者の思いや曲の背景についても、イの学びと関わらせながら考えさせる。

(2) 音楽を形づくっている要素の知覚・感受を手掛かりとして思考・判断させていく「発見」を積み重ねる指導の工夫

「3(1) 曲の味わい方を焦点化させる指導の工夫」を踏まえて指導の流れを組み立て、生徒が楽曲を繰り返し聴く中で「発見」を積み重ねながら、鑑賞することができる学習過程を構想する(図3)。

既習事項を踏まえながら、「今回のエレメント」をよりどころに、作曲者の思いや曲の背景を学んでいくなど「発見」を積み重ねるように組み立てる。例えば「第1の発見」では既習事項と関わらせながら、「今回のエレメント」をよりどころに「第2の発見」につながるよう学習過程を構想する。

また、生徒自身が「発見」の積み重ねを実感できるようにすることも大切であると考える。

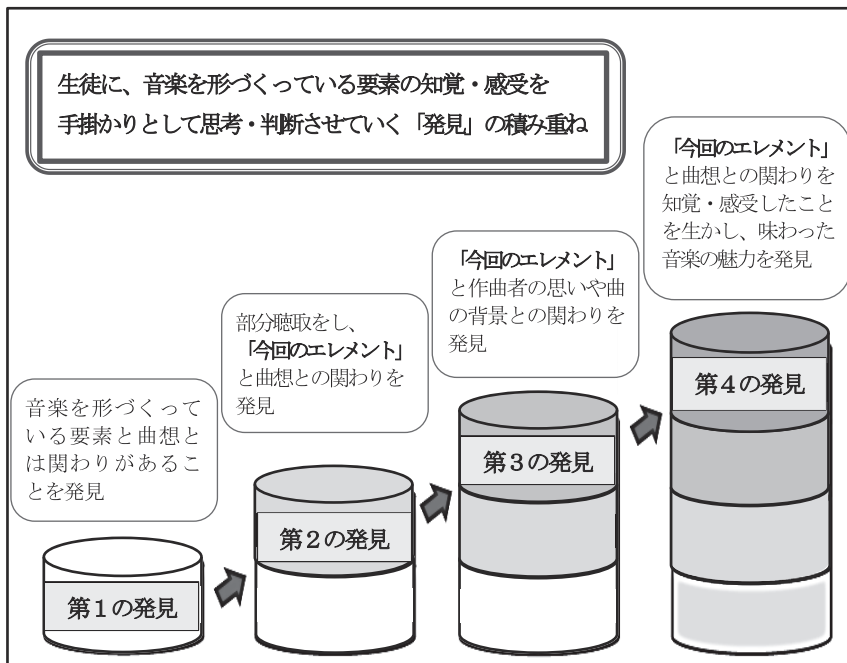


図3 「発見」の積み重ねのイメージ

4 検証授業及び検証授業の分析

(1) 検証授業の概要

令和元年10月29日と11月6日に、都内公立中学校第3学年において題材名「音楽を形づくっている要素と曲想との関わりを理解して、作曲者の意図を感じ取り『ブルタバ』の音楽のよさや美しさを味わおう」として、次のような指導計画(全2時間)で授業を実施した(表1)。

「今回のエレメント」は音色、旋律、強弱の3点である。

表1 検証授業での指導計画(全2時間)の概要

第1時	[目標] 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受し、曲想との関わりを考える
	○既習事項から <u>音色</u> 、 <u>旋律</u> 、 <u>強弱</u> と曲想との関わりに気付く【第1の発見】 ○音楽を形づくっている要素のうち、 <u>音色</u> 、 <u>旋律</u> に着目し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感知取る【第2の発見】【第3の発見】
第2時	[目標] 音楽を形づくっている要素と曲想との関わり、曲の背景・作曲者の思いとの関わりを、知覚・感受しながら「ブルタバ」の音楽のよさや美しさを味わう
	○音楽の特徴と曲の時代的・社会的背景との関わりや作曲者について学習する【第4の発見】
	○ <u>音色</u> 、 <u>旋律</u> 、 <u>強弱</u> と曲想との関わりについて知覚・感受したことを生かしながら、この曲の背景にある作曲者の思いに気付く、自分なりの価値を見付ける【第5の発見】 ○曲のよさについて価値付けしたことを自分の言葉で表現する

(2) 検証授業の分析 ～曲の味わい方を焦点化させる指導の工夫の有効性について～

「曲を聴いてその曲のよいところを見付けることができるか」という質問項目に対して、肯定的に回答した生徒の割合は 77%から検証授業後には 95%になり、18ポイント増加した（図4上段）。

また、検証授業前の調査結果で課題として捉えた「聴いた音楽の魅力をも、自分の言葉で根拠をもって表現すること」について肯定的に回答した生徒の割合は、検証授業前に比べて 53%から 88%に 35ポイント増加し、また「そう思わない」と回答した生徒の割合は 15%から 0%に減少している（図4下段）。

題材の最後に実施したまとめの発問に対する記述から、生徒一人一人の学びを分析した。その結果、95%の生徒が聴いた曲の魅力をも今回の検証授業において、焦点化した音楽を形づくっている要素に基づいて表現していた。以下は生徒が記述したその一例である（図5）。

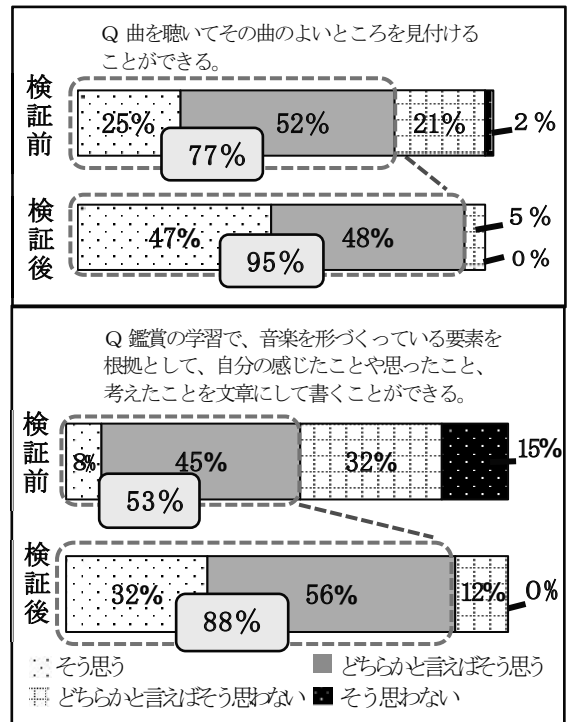


図4 生徒の意識の変容

題材のまとめの発問 「ブルタバ」の音楽全体を聴いて、この曲の魅力について、この曲を知らない他の人に紹介したいこととその理由を挙げて、自分の考えを書いてください。

全体的に、チェコ民謡の旋律やリズムが取り入れられて、複雑なリズムや楽器の音を足して明るく、晴れ晴れとした感じが強く感じられた。それぞれの標題の変化でいろいろな旋律があり、作曲者の人生で様々なことがあったんだな、と思わされるような感じだった。「月の光」の部分は、いきなり弱く、優しい楽器の音色になっていて、他のテーマのときと強弱の変化をはっきりと感ずることができた。また、他の場面と比べ、旋律が全然違って、個性を感じる場面だった。理由はハーブのキレイな音色とヴァイオリン、フルートの静けさのある音色が混ざっていて、すごく気持ちの落ち着く場面になっている。とても水面や夜や水の精が頭に浮かびやすく想像力を働かせられる、おもしろい場面でもあった。

図5 生徒の記述例（下線部は、清水加筆。）

このように、曲の味わい方を焦点化させる指導の工夫を行ったことで、生徒がその曲のよさを見付け、音楽の魅力について自分の言葉で根拠をもって表現する姿が見られたと捉えた。

第4 研究の成果

生徒が曲の味わい方を焦点化できるよう「今回のエレメント」に着目をさせるなどの、曲を聴かせる前の指導の工夫を行った。検証授業で実施したワークシートの分析では、生徒は「今回のエレメント」を思考・判断のよりどころとして「発見」を積み重ねていくことで、味わった音楽の魅力について自分の言葉で根拠をもって表現することができるようになった。よって、本研究における指導方法は、生徒が音楽のよさを味わって聴くことができるための有効な指導方法であると言える。

第5 今後の課題

本研究の指導方法を他の題材でも実施していく。さらに表現領域とのつながりを考察しながら音楽的な学びを継続して積み重ねることで、生徒の深い学びの実現につなげていく。